

西大巔・南西ルート山スキー報告

【山城】福島県・吾妻・西大巔

【日程と天気】2016年2月11日（木）曇り・ガスのち晴れ

【メンバー】CL菊池・鈴木（秀）・住田・吉川・石井・加藤・薄井・伊藤（会員外）

【行程】グランデコススキー場トップ（4Q）－西大巔山頂－東斜面エントリ－撃沈－西大巔山頂－南西ルート－1600m付近から南尾根ルート－登山道ルート（1350m前後のほぼ水平道・最後にわずかの登りでシール使用）－橋－ゲレンデ



・数日間冬型でかなりの降雪があり、パウダーランを期待、当日の天気予想は大きな高気圧が本州の真中にある、絶好のツアー日和であるが、寒気が残っておりゲレンデコススキー場到着時は小雪が舞い、スキー場の上部はやや強い風が吹いていた。

8名中6名は吾妻での山スキーは初体験である。天気も回復に向かっており、期待に胸を膨らませシラビソの森にシール登高を開始すると、かなりの深い新雪が50～70cmはある。センター幅100mmのファットを持参してよかった。かなりの先行者がありトレースはしっかり、雪に覆われた背丈の高いシラビソの林間では風はほとんどなく順調に高度を稼いだ。山頂に近づくと斜度が増し、密なシラビソ林は凹凸が激しく先行者のトレースも複雑な経

路で前進、ガスで視界不良の中、ニセピークを經由して数m下り、広い緩斜面にまっすぐ伸びるトレースを辿ると間もなく西大巔の山頂に達した。

・ガスで視界不良、数名がこれから飛び込む東斜面を観察していた。目を凝らして周囲を観察するとすでになりの方々が風の弱いモンスターの脇で休んでいる。今回のメインデッシュの一つ、待ちに待った東斜面の激パウランを早く実現したいとメンバーに気合を入れる。「しっかり滑走準備してください、ボトムまで標高差 100m ほど滑って行動食を取りましょう」とそそくさと準備をした。ガスはなかなか晴れないが、その間に本日のファーストトラックを狙った二人が飛び込んだ。「ウオー」というような雄叫び??が聞こえた。東斜面の積雪の状況と先行者のシュプールを観察すべく斜面を覗いてみると 2 本のシュプールはわずかなターンしか描いておらず、長いヘビのような、緩いニョロニョロの直線的なシュプールである。かなり雪質が重いものの、小生はもう少し綺麗なターンを描きたいと考えながら、メンバーの滑走準備完了を待った。弱層はなく、30 度弱の斜面であり、まず雪崩の心配はなさそうであると判断。さあ、2 番手のわがちば山軍団のエントリーの番だ。先行シュプールの右側はまっさらだ。ノートラインに慎重に飛び込んだ。深い・重い・深すぎる・・・うう、なんとか浅い 2 ターンを刻めたというか・止まってしまった。腿まで埋まっている。体勢を整えて、フォールラインに向いて板を浮かせながら滑走し始めるが、全く浮かない、幅広のトップが沈んでいく。これはやばいと 15m ほど下った地点で断念した。後続の 3 名も追って恐る恐るエントリーしたがどうしようもない。2 名はバランスを崩してすぐに転倒、起き上がるのに苦戦し、かなりの時間を要した。「今日はこの斜面はやばい、今回は中止、シールを付けて何とか登り返そう」とメンバーに声をかけた。上部から後続のグループが飛び込んできた。間もなく「わー」と声を発して女性が転倒、板が外れ、片方の板が雪に埋没、見つからず探し出すのに苦労していた。

激パウの極楽斜面と評判の高い東斜面であるが、想定外の悪条件である。強風で吹き溜まった深すぎる新雪に、あえなく撃沈するとは予想できなかった。雪が少ないといって嘆き、降ったと思ったら多すぎて危険な状況となってしまう。自然は侮れませんね。

・ハウハウの体で深雪をラッセルして稜線から山頂に復帰、この手強い深雪で初めての南西ルートは無理か、往路を下るしかないかなと考えていると、一気に天気は回復してきて青空の下、モンスターが現れると少しはテンションも復活してきた。



とりあえず、山頂直下南面のオープン緩斜面が滑るかどうか見てから、予定通り南西ルー



トにするかどうか判断しようと、メンバーに伝え、緩やかな稜線を滑走してみると、沈まず何とかゆっくりターンしながら滑れる。オープン緩斜面に入るとまたガスで視界がやや不良となったが、ここも気持ちよくゆっくりターンが描ける。「南西ルートに行きたい」と積極的な女性メンバーから声がかかる。不安を抱きながら、右方向の南西ルートに入って



いった。斜度が急になりシラビソ林が密、凹凸が激しくルート取りが難しい。バランスを崩して転倒すると復帰に難儀する。慎重に斜滑降などで下ったが、狭い林間を通過する場



面などで転倒したメンバーが2名ほどでた。やはり起き上がるのに、並大抵でない。復帰にかなり時間を要した。天気は益々よくなったが、このまま南西ルートを下るのは無謀かと CL としては悩みの時間帯であった。少し下ると斜度が緩み始め、無難に滑れる。そして左からほかのグループのシュプールを発見できた。そして間もなくシュプールの持ち主の二人連れが休んでいた。声をか

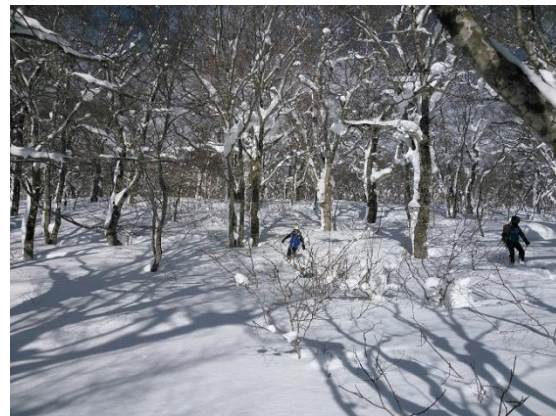
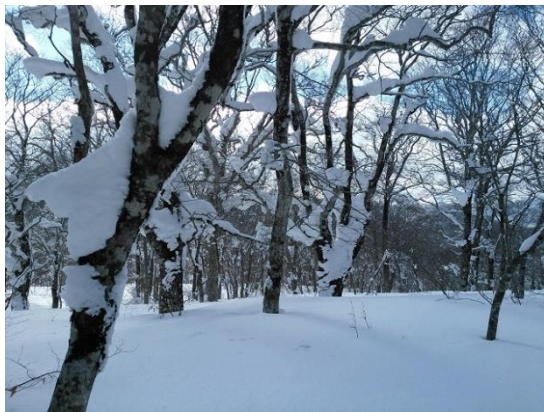


けるとこのルートをよく利用するとのこと。これで一安心、少し気が楽になった。その後は GPS を頻回にチェックしながら緩斜面の上質で快適なパウダーランを楽しめた。他に二人連れのスキーヤーとスノーシューの登山者に会うことができ、不安感を取り払うことができた。雪に覆われた

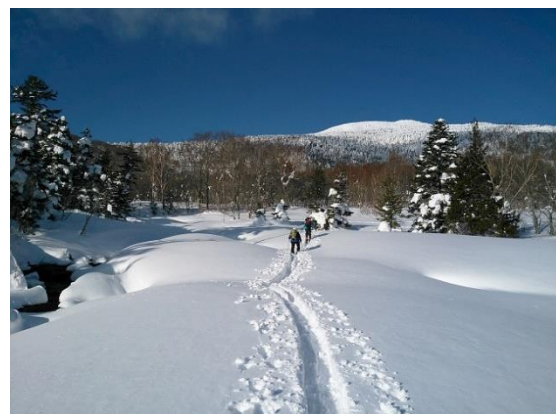


素晴らしいシラビソの下で余裕の行動食休憩をとることができた。樹層は間もなく小生の大好きなブナ林に代わり、CLとして緊張が持続してやや疲れていた気持ちを癒してくれた。

・当初の百貫清水経由はこの深雪では時間がかかりすぎるため、標高 1600m 付近から南尾根ルートに修正しながら、標高 1350m 付近をほぼ水平に辿れる登山道ルートにでた。トレースはなく先行者はかなり上部からゲレンデに向かうルートを取ったようだ。



数か所小さな沢地形が複雑な凹凸を形成しており、ゲレンデに近くなると緩やかな登りのため、シールを使用せざるを得なかった。下山当初は過度の深雪・初ルート・多人数・などなどで一時はどうなることやらと不安感いっぱいであったが、後半は良質パウダーを堪能でき、終わりよければすべてよし、ではないが、なかなか味のあるツアー感溢れる好



ツアーであった。

